

く才能をもっている。とりわけ、沖繩出身ということもつづつてか、天皇制の生態系をえぐり出す手さばきは鮮やかである。この本でも、沖繩における日の丸・君が代の問題を単に「国旗・国歌」の問題ではなく、沖繩の歴史や現在の政治文化状況と関連させながら鋭い指摘をしているし、また作家、曾野綾子が「集団自決」をテーマに書いた「切りとられた時間」や『ある神話の背景』の欺瞞性をあばきながら、それが「教科書問題」や臨教審あるいは「靖国問題」などとも関連する背景から出てきていることまで言及している。そして沖繩とヤマトの双方を見すえながら貴重な提言をいくつか発している。

「平和の像」破壊のニュースがとびこんできたとき、私はたまたま金城さんといっしょにいたが、「像はいずれまたつくればいい！」と金城さんは毅然とした口調でいって。金城さんの説谷村とかかわりも、彫刻芸術を通しての「理想の共同体」づくりも、沖繩を彫りながら天皇制を掘り崩す作業も、いよいよこれからが正念場になるだろう。金城さんが今後どんな芸術社会運動にふみ入っていくか刮目して期待するとともに、私たちが沖繩連帯Ⅱ反天皇制運動の幅と厚みをひろげ、肉づけするための知恵をしばっていかねばならないと思う。（現代書館刊、一五〇〇円）

アートは自由だ！「不敬罪」の復活を許すな

小倉 利丸

富山で、ひとつの極めて深刻な表現弾圧が進行している。この起こりは、昨年の春にさかのぼる。

富山県立近代美術館が「86富山の美術」展のために買入れた大浦信行氏のリトグラフ「遠近を抱え

て」(一シリーズ十点のうち四点を二十万円で買い上げ、残り六点を寄贈という形で取得した)が、天皇を作品のモチーフのひとつとして用いていることを理由にして、六月、七月の県議会で、社会・市民両党議員がこの作品を「不快」だと問題にし、右翼が全国動員で美術館と監督部局である県教育委員会に押しかけ「不敬な作品を焼却し、館長を解任せよ」と恫喝をかけた事件である。結局、美術館と県当局は、この右翼の恫喝と議会の圧力に屈して大浦氏の作品を

「美術資料」として保管するにとどめ、公開しないことを決定してしまっただけで、問題は、これだけにとどまらなかった。県当局は、問題が表面化した段階で十点のうち寄贈として取得した六点を早々と作者に返却してしまっただけで、大浦氏の作品が掲載されている図録「86富山の美術」を販売を資料として保管している県教育委員会文化課でも図録のなかの大浦氏の作品が掲載されているページを「来客者の目に触れて不快感



大浦信行氏のリトグラフ「遠近を抱えて」

緊急出版!

テロリズムとメディアの危機

朝日新聞阪神支局襲撃事件の真実

定価一〇〇〇円

これは歴史に残る謀略だ——5月3日夜半、当社近隣で起こった朝日新聞阪神支局襲撃殺人事件をめぐって、いま百鬼夜行のワウサと鷹刺と情報飛び交っている。晴天のへきしで直接的・間接的に巻き込まれた当社が、多くの知識人の賛同をもって、社運を賭けて世に問う渾身の闘い!

【主な寄稿者】浅野健、高野孟、粉川哲夫、鈴木邦典、松本均、呉智英、和田洋一、岡留安則、竹中芳、南博、橋本治、大石義雄、岡浦勇ほか。

70年代を過る

●近日常!



定価一五〇〇円

長崎浩Ⅱ対敵集
60年代ブライカリスムの旗手・長崎浩が現代思想の最前線に切り込まず待望の書! ①廣松渉、マルクスと近代の物象化社会 ②吉本隆明、科學の普遍性を問う ③上治と70年代における政治経験の位相 ④小阪修平、市民社会とブライカリスムの行方 ⑤柄谷行人、安保以後の大衆運動 ⑥森崎和江、共同体幻想の深淵 ⑦佐々木幹郎(われわれの崩壊・わたしへの問い) ⑧湯浅雄男、池田浩士、党と政治への解視 (解題) 高橋一

エヌエル出版会

【発売】鹿野社(くさしや)

西宮市鳴尾町二丁目十一番三二〇一
☎〇七九八一四六六八二三 振替 神戸八二五九九七



を与えてはいけない」という理由でそっくり切りとっている。しかも、驚くべきことに、図録を所蔵している県立図書館でも、この図録は県の機関が販売禁止とした決定を受けて閲覧禁止処分にとられ、なおかつ検索カードも抜き取られている。そして、一年たった今年の夏、県当局は、大浦氏にたいして、作品の返却を申し出るに至っている。当然のことながら大浦氏は、これを断っている。県当局の動きは、多くの点で右翼の要求に即している。右翼の抗議文のなかでは、焼却処分ができないのなら寄贈分の作品を返却すること、残りの作品も作者に返却することを要求している部分があり、それが無理ならば金を出して買い取る(もちろんその後には焼却するのだろうか)とまで言っている。また、県当局は、今回の事件の処理に当たって、宮内庁にまで出掛けている。私達は、事態をこのまま放置しておくことは、図録の断裁処分や作品の売却を招くおそれがあると判断し、「大浦作品を鑑賞する市民の会」を結成し、今年の十一月に作品の公開禁止、図録の販売禁止という県の処分の不当性を訴えるために最低限の法的な対抗措置を構じた。まず、作品については、美術館の「特別観覧」の手続き(収蔵庫に保管されている作品を観覧するための手続き)を利用して作品の観覧を請求したが拒否されたために、行政不服審査法にもとづいて審査請求をおこなった。また、作品および図録を県の情報公開窓口を利用して「公文書」として公開請求したが、これも却下されたために情報公開条例にもとづいて異議申し立てをおこなった。場合によっては法廷での闘いになるだろう。

今回のこの問題はいままでの表現弾圧の事件といくつかの点で本質的に異なる。第一に、この作品が明確な天皇批判を意図しているとは解釈できないにもかかわらず、天皇の扱いが不適当だということによって弾圧された、ということである。この作品についての天皇の扱いは多義的な解釈の余地をこの



しているにもかかわらず、政治家が解任の決定権を握り「不快」なものど決めつけたということである。第二に、作品だけでなく、それに関わる図書まで徹底して目に触れないような処置がとられているということである。第三に、しかもこうした処分を行うにあたっての理由が全く恣意的で、天皇に対する「不敬罪」的発想にもとずいているということである。たと

えば議会の教育警務委員会では「天皇陛下の写真に女性の裸体や人間の内臓図、骸骨などを組み合わせたもので、何ともわけがわからず不快感を覚えた」(自民)とか「国民が天皇在位六十年を祝賀した直後に、こうした作品を展示するのは、芸術の美名に隠れて一部のもが快楽を覚えているだけではないか」(社会)などという発言がみられ、これらの議論をふ

まえて美術館館長小川正隆(前朝日新聞美術記者)は館長見解として、「私の平均的日本人のひとりとしての心情は、県議会議員の皆さんとかわらぬものと確信しております。今回のように、一般の不快感を誘うような場合については、今後の運営にあたって、より細心の注意を払ってまいりたいと考えております。」といった美術関係者としては自殺行為としかおもえないことなれ主義の言い訳をしている。しかも、この公的な決済も受けていない館長見解が、議会で報告されたことを理由に公的決定扱いにされ、作品の公開禁止、図録の販売禁止などの一連の処分がすべてこの非公式な見解に基づいて行われているということである。第四に、この美術館をめぐる「発禁」処分は、図録がいつも簡単に図書館で閲覧禁止にされていることや全体の事のいきさつからして、図書館に所蔵されている図書において起きても不思議のないものだ、ということである。たまたま議員が目にしたのが美術作品

であったということであって、もし件の社会党議員が図書館で天皇批判の書籍を目にして「不快」だとか「名誉毀損」だとか言い出せば同じように閲覧禁止とされる可能性があるということだ。第五に、この表現弾圧に積極的に関与したのが、自民党議員ばかりでなく社会党議員であった、ということである。そして共産党もこの件に関して全く沈黙しているということだ。

こうした自主規制は、天皇制批判に代表される社会的な批判を意図した作品や不快感をモチーフにした作品の排除をもたすだろう。美術館は、表現行為についての原則を守ることもなければ、まともな美術論争を提起することもなく、まさに政治的にことを処理しようとした。瀧口修造の精神をひとつの出発点におき、モダンアートに焦点をあててきたこの美術館もこうした政治的な思惑に取り込まれることによって、もはや開館当初にみられたエネルギーは感じられない。

世界が

民衆連帯のための特集30

I 噴き上げる韓国労働者の力

〈現地報告〉
関心の熱気の中 森下由紀子

〈資料〉
生存権闘争から新しい社会実現の闘いへ 吉水長生

韓国レポート 張白山
民主・統一民衆運動連合綱領

戦後民主主義がたとえ虚妄であるとしても、しかし建前としてはいくつかの原則を掲げてきたことも事実である。「表現の自由」もそのひとつだ。戦前の検閲制度は差し当たり市民社会のおおかたの領域では廃止され、思想、表現の自由は、大幅に緩和された。しかし、検閲の残された領域もある。公的な権力の介入という点で見れば、性表現と監獄での検閲、そして教育の現場はその典型である。いうまでもなく、私的な企業における自主規制や自主検閲になれば枚挙にいとまがない。とりわけ、天皇をめぐる表現の規制は、公的権力による露骨な弾圧や検閲によるよりも、自主規制によるほうが

一般的であり、民間右翼による喝が権力を代行するものとしてつねに登場してきた。しかし、今回の県立美術館の事件は、公権力が公然と天皇にたいする表現にたいして「不快」などという曖昧でいい加減な判断基準を建前としてもちだしつつ、実質的に「不敬罪」的発想によって天皇批判を抹殺しようとしたという点で、決定的に新たな事態だといえる。こうした事態は、ポスト「昭和」を先取りした展開ともいうことができ、絶対許すべきではない。作品を常設展示場に展示させ、図録の販売を再開させる闘いをなんとしても貫かねばならない。多くの皆さん、とりわけアーチストの皆さんの熱

烈な支援をお願いします。今回の事件についての資料パンフなどほしい方は百七十円切手をフィクション

同封の上、富山市綾田39・27・10小倉利丸まで申し込んでください。

反天皇制オカルト小説の破綻

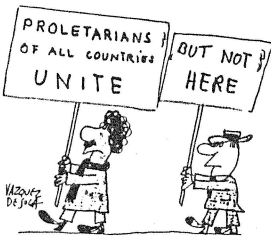
『帝都物語』(荒俣宏著)

山崎カヲル

世界最大の国際金融市場のひとつに成り上がった東京は、情報のごくわずかな差異や、その伝達速度が価値を生むがゆえに、ハイ・テクノロジーの網の目でびっしりと覆われつつある。しかし、この電子の駆けめぐる都市の奥底には、深い隠妙な力がうごめいており、この力の織りなす世界は、時には新宗教の無数の抬頭として、

時には「口裂け女」の跳梁や子供たちの「浮浪者」襲撃として、私たちの視野をくつきりと横切ったりする。都市の身体がコンクリートと被覆ケーブルに化するに依じて、その魂は実体的な支えを失なうて、擬似原始的な層へと滑り落ちるらしい。

荒俣宏の『帝都物語』(全十巻、現在角川文庫に収録)は、東京を



II アンア人出稼ぎ労働者

なぜ労働力は海を渡るか 印鑰智哉

差別と搾取の壁の中で 藤本伸樹
日本の「最底辺」からの報告

労働力輸出大国フィリピン
(インタビュー)
アジアの女性と出稼ぎ労働 松井やより
日本のタイ侵略と天皇 井上清
日タイ修好一〇〇年の実相

定価850円(送料別)
年間購読料3200円(送料共)

アジア太平洋資料センター (PARC)
東京都千代田区神田保町1-30 正光ビル402
電話 03-291-5901
振替 東京6-163403